

寝取られるだけじゃ済まなくて、

重要!

ご主人様のアシと同じ形

固定中(笑)

サークル
僕はマゾです

夫婦の共有奴隷にされた僕



リクエストを下さった寝取られマゾの耕乙氏に、格別の感謝とこの小説を贈る。

0.
プロローグ

子供の頃から所有したモノにランク付けをして、ランクに沿った扱いをするのが私の『所有の楽しみ方』だった。

凄く大勢の人から勘違いされていたけど、ランクが下だからといって愛情の分配量まで違うわけじゃない。

ただ、ふさわしいと思う扱いをしてあげるのが正しい愛し方だと思うだけ。

私には、小学生の頃から大学までずっと一緒だった男がいる。

中学の頃から付き合っていて、彼が奥手だったから初めてのセックスは大学に入ってからだった。

純だけど心に闇みたいなのを抱えていて、何かいつも大きな波のような得体の知れない何かに飲み込まれるのが自分のあるべき姿であると思っていて、わざわざ自分から冬の海に半身浸かっているような、そんな感じの男だった。

まだ世間知らずな小娘だった私はそこが気に入って耕平と付き合った。

まあ、彼の顔が可愛かったことは否めない。

少しいじめてやると、その顔が物欲しそうな哀願の顔になるのがたまらなく可愛かった。そんな男だから自分からセックスしたいとは言い出さなかったし、私もヤリマンだった未可子から「最初はマジで痛い」と聞いていたから、わざわざしたいとも思わなかった。

そんなこんなで大学までサクッと時間は過ぎてしまった。

ところで、大学って入ってわかったけど、勉強させる為の機関じゃない。

あれはどう生きるか自分で判断させるための機関。

ほとんどの人間が子供の頃から強制されてきた教育からの脱却を実感できてしまう。だけど、大学の本当の意味である「これからどう生きるか自分で決めてどう努力するか」は誰にも教えてもらえない…そういう機関。

結果、誰にも「勉強しろ」だの「スカートの丈が」どのどの言われずに済むので、皆ハイになって好き勝手やる。

健児はそんなハイな大学生で、いかにもヤリチンだった。見た目も髪は脱色しまくりだし、パーマも結構ガツツリ。でも凄くオシヤレで、凄く女の扱いが上手そうだった。

―出来れば最初は、痛くしないで欲しい―

多分これは多くの女子がセックスに関して思っていることだと思う。私もそう思っていた。小娘なりに、セックスは結構人生において重要な比重を占めていると思っていたから。そしてそれは正解だった。

つまり何が言いたいかというと、私は大学生になってすぐに…。

入学してハイになったまま、健児とセックスしたのだ。

健児はヤリ慣れていたようで、当初の見通し通り、そこまで痛くしなideくれた。

実はこの時私は少し、優越感と恍惚感を感じていた。

チ●ポの大小とか、セックスの巧さ云々よりもソツチのほうが快感だった。つまり、少しだけ『自分が耕平よりも経験豊富でいることが嬉しかった』のだ。

この嬉しさの正体が、優越感と恍惚感なのだと思ったのは耕平のおかげだと思う。

耕平の性格や行動を見れば彼が童貞なのは明らかだったし、正直それでゼミの女子から彼が馬鹿にされていることも知っていた。

彼の心の闇を知っている私としては、痒いところに手が届いたような、なんとも言えない達成感で嬉しくて堪らなかった。

もちろんこの時まで耕平と付き合っていた私は、健児に処女をあげたことを耕平には一生内緒にしようと思っていた。

でもそうは問屋がおろさなかった。

健児が女とヤリ慣れてるくせに、私を「自分の女」だと周囲にふれまわったからだ。

醜聞は光よりも早く、確実に、最も届いてほしくない人間に届く。

耕平の耳に届くまでに時間はかからなかった。

私は耕平に呼び出された夜。

どんなに自分が殴られても自分が悪いと、我慢する覚悟で行った。

半殺しでレイプされても仕方がないとさえ思っていた。

でも耕平はそんな酷いことを私にしなかった。

その代わり、私にきちんと態度と言葉で自分がどういう人間なのか示した。

「あの…ずっと付き合っていて言えなかったことが有るんだ。

実はその…ま……………、マゾ……………なんだ。

それであの…実は…マリコが…あの……………他の男性と……………その……………」

「……………」

「それで、あのもし良かったら…その……………」

耕平はそう言いながらベルトを外して、ズボンとパンツを同時に降ろした。

私は

（ああ、ここでレイプされるんだな。

もう少しきれいなところが良かったな。

でも私が悪いもんね。しようがないか）

と考えながら、歯を食いしばって殴られるのを覚悟した。

でも耕平は私を殴らなかつたどころか、耕平は恥ずかしそうに股間を両手で抑えていて、

「あ…あの…？」と私が声をかけるまで震えていた。

そして両手をそつとどけて、貞操帯の中で我慢汁をダラダラ垂らしていた。

「あ…見、見ないで…」

「見ないでって、何これ？」

耕平は貞操帯というものを私に教えてくれた。

やりたい盛りの男にとってこんなにも悲しい拷問はきっと他にない。

でも耕平はそれを嵌めて、そして鍵をかけた。

その鍵を私に捧げるように手渡して、こう言ったのだ。

「捨てないで…お願いです……。」

心からお慕い……いえ、崇拜しております。

本当はずっと…その……もっと早く敬語でお話すべきだと……。」

「ねえ、この鍵…どうして欲しいの？」

「それが無いと…僕のおチ●ポは、勃起できません。」

完全に……マリコ様に僕のおチ●ポを……所有して……うっ…欲しい…です」

「……？」

「僕にとつてそれは……僕みたいなマゾがマリコ様とお付き合いさせていただく唯一の手段だと……思うん……です」

「あく、そういう事」

私はレイプされたとしても全部自分で責任を取るつもりでいたから、ホツとしたって言うか脱力で上手く考えがまとまらなかった。だからだと思うけど、普段なら絶対聞かないことを、その後の私の人生を左右するようなとんでもない大事な事を、聞いてしまったんだと思う。

「私が許すまで耕平くんが、」

「あ、『耕平』と呼び捨てで……」

「ん、分かった。耕平は私が許すまでセックスさせてもらえないどころか、オナニーもダメ、勃起も許されないってことね。」

分かった。

じゃあ、私は今後も好きにさせてもらうわよ」

「…え？」

「鍵って本当にコレ一本？」

「本当はもうひとつ有るんでしょ？」

「あ…いや…あのその…もう一本は方が一の時の……」

「ダメよ。鍵は交換。未開封の鍵を買って来なさい。」

それなら付き合っただけでいいよ」

「あ…はい…分かりました……。」

あの……その…さっきの…あの…『好きに』って、あの…どういう意味…でしょうか？」

「決まってるでしょう？」

皆大学に入って、ヤリまくりなのに私だけ貴方のチ●ポ管理だけなんて嫌よ。

私も好きだけさせてもらうから、そのつもりでいなさい」

「え……で、でも……」

「マゾの貴方が清純を保つのは当然でしょ？」

でも私は私で、私の好きにする。

これが私たちの『お付き合い』の仕方よ。

いいわね？」

「あ……ふう……っ！」

は……はい。分かり……ました……」

「分かったらさっさと鍵を買って来なさい。

南京錠よ。

ゴツくて絶対壊せないヤツ」

私は、耕平をこの場から下からせて一呼吸入れたかったから、あえて指摘しなかったけど耕平の下半身はプルプル震えていた。

そしてその中央に備え付けられた男の象徴から、透明な液体が垂れていた。

とても嬉しそうに……。

大学を卒業するとすぐに私は健児と結婚した。

健児は在学中に自分でアパレルメーカーを立ち上げて、周囲から「意識高い系？」と一口を叩かれながらも、ちゃんと稼いでいた。

性欲やストレスが溜まると、私を呼び出して私の膣の中に白濁をどっぷり出すと、またすぐに仕事、仕事、仕事。

健児は大学が『これからどう生きるか自分で決めてどう努力するか』の機関であること、をかなり早くから理解していたんだと思う。

最初は馬鹿みたいな子供だまだったけど、それなりに売れるようになるまで時間はかからなかった。

気がついたら私と健児は学校では知らない人が居ないぐらいの有名カップルだったし、いつの間にか「意識高い系？」と笑いに来る連中もいなくなっていた。

卒業する1年前から私は健児の仕事を手伝っていたから、私自身も就職活動なんてするヒマなかったし……。

一方、耕平はいつも泣いていた。

私が4年間で1回もセックスしてあげなかったからだ。

調教さえしなかった。

ただいつも健児とラブラブデートしてるところを少し離れた所から観察させたり、キスしてる写真を見せてあげたり。

健児には結構早い段階で耕平の貞操帯の鍵のことは話しておいた。

その方が健児も安心するだろうと思ったから。

健児は仕事で忙しかったから、「本当なの？大丈夫？鍵はしっかりしたものにしておいたほうが良いよ。そういう奴はヘタに別れ話とか持ちかけるとキレるから、適度に距離を取りな」とだけ言ってきた。

健二の言う通り、すぐに貞操帯の鍵をより頑丈にしたのは言うまでも無し。

そんな滅茶苦茶忙しかった健児は、卒業半年前ごろから時間が取れるようになっていった。「人を雇って、自分が居なくてもそこそこ組織が回る仕組みと作った」って言ってたけど私には、自分が居なくても他人が組織として稼いで、健児に上前を差し出す理由がよく理解できなかった。

でも確実に理解できることが有る。

大学4年間、ずくつとオナニーしたい、射精したい、セックスしてみたいと恋い焦がれ続けるだけの、『子供の頃から矯正されてきた教育からの脱却を実感』してるだけの耕平と『これからどう生きるか自分で決めてどう努力するか』を誰に何を言われるわけでもなく貫いた健児とでは、貯金通帳の残高も社会的信用も、企業からの採用通知の質も数も全然違った。

一生を左右する結婚相手に、どちらを選ぶべきか。私の『これからどう生きるか自分で決めてどう努力するか』という大学の意義はこの2択なんだと、私はそう理解した。そして結婚相手には、健児を選んだのだ。

ただし此処でちよつと想定外のこと起きた。

耕平の貞操帯の鍵だ。

卒業前に1回ぐらい好きだけ、耕平の好きなようにやらせてあげてから「さようなら」を言おうとした私に耕平はこう言った。

「このままでいさせてください」

「もうSMごっこはお終い。」

耕平だって十分オナ禁楽しんだでしょ？

どんだけ辛かったの？

泣くほど？

涙が枯れるほど？

貴方は4年間全力で楽しんだんだし、私は健児と結婚するのよ？

貴方がいても邪魔なだけなの」

「おっ…お二人の邪魔はしませんっ！！！」

奴隷として夫婦でその…あの…」

私は耕平に言われたことをそのまま健児に伝えた。

誤解の無いようにきちんとおおくけど、ここまでは予想の範疇。
多分そうなるだろうと思ってた。

耕平と知り合ってから長いもの。分かるわよ。

でも、想定外だったのは、この先。

健児がOK出したこと。

結婚前だっというのに他の男と、それもセックス目的で二人きりで会っていたのだから、私は健児に責められると思っていただけ、そうはならなかった。

「それどころか「耕平はこのままで良い」とか言い出した。

「それってつまり、浮気公認ってこと？」

「ははっ、違うよ。耕平は奴隷なんだろう？」

マリコが所有する、単なる奴隷。

実際相手じゃないし、人間扱いしなくても良い。

いわば単なる所有物。

本棚とか、スマホと一緒。

俺たちが結婚したら、それぞれの財産は2人の共有になるんだから、2人で所有すればいいじゃないか。

マリコが『要らない』なら、捨てても別にいいけどね？

どうする？」

「でも夫婦で奴隷を共有って…」

「欧米ではよくあるよ？夫婦で共有奴隷を飼ってるって。色々便利みたいだし、飼っちゃえば？」

あ、でも夫婦共有奴隷は、奴隷側からすると結構キツイみたいだから、ちゃんと試験しておいた方が良い。

どんな命令でも聞けて、夫婦に奉仕することが最上の悦びである奴隷かどうか…。

面倒事は困るからね。

ま、どっちにせよマリコが決めな。

結婚した後も耕平という奴隷を飼うか、今のうちに捨てるか…。

まあ俺なら、4年間もマリコの為に射精しなかったんだから、試験ぐらいは受けさせてやってもいいと思うけどな」

「……………うん。明日、耕平と会うだろうし、明日の朝まで考えてから決める」

「おお、そうだ！」

「……………？」

「今のうちに『夫婦の共有奴隷試験』をリストアップしておくから、耕平に試験を受けさせる気なら、使いな」

「うん。ありがとう」

やっぱり健児との結婚を決めて正解だった。

最初はヤリチンのチャラ男系だと思っただけど、今は凄く彼がたくましく見える。

私は耕平に試験を受けさせることに決めた。

|| || 健児・マリコご夫妻の共有マゾ奴隷・採用試験 || ||

※※※試験その1 礼儀作法試験※※※

いかなる場所、いかなる時間、いかなる状況であっても健児・マリコご夫妻のどちらかお一人あるいはお二人の前に奴隷が存在する場合、自らすすんで土下座をすること。

土下座は健児・マリコご夫妻のどちらか、あるいは両名が奴隷の頭を踏んでくださるまで続けること。

これは公衆の面前であろうと、健児・マリコご夫妻のいずれかが特段の許可を与えない限り必ず実行するものとする。

また、口調は常に尊敬語・謙譲語・丁寧語を常とし、奴隷の身分を踏まえ健児・マリコご夫妻以外にも同様に尊敬語を用いること。

※※※試験その2 禁欲試験※※※

奴隷は射精を、偶発的なものを含め、その一切を禁止する。
射精禁止期間は、健児・マリコご夫妻の結婚式まで。

万が一これを破った場合、射精を禁ずる施術を奴隷に施す。
例外は一切認められない。

また、奴隷は禁欲が絶対的な規則であるが、健児・マリコご夫妻には最上の快感を授受頂くよう、自ら奉仕しなければならない。奉仕の内容は健児・マリコご夫妻が順次決めるものとするが、自ら便器となる等、自発的かつ積極的に健児・マリコご夫妻の快感を促すこと。

※※※試験その3 絶対服従と懲罰甘受に関する試験※※※

健児・マリコご夫妻から何らかのご命令・ご指示があれば奴隷は一切の滞りなくこれを遂行すること。

奴隷の行いが、命令の内容にそったものであるか否かは健児・マリコご夫妻が判断を下す。過不足があると判断された場合、奴隷はいかなる懲罰も受け入れなければならない。

健児・マリコご夫妻が満足されるまで懲罰を受けきることも試験項目の一つである。

※※※試験その4 寝室奉仕試験※※※

健児・マリコご夫妻のセックス後は、お二人の性器を口で綺麗にし、許可があれば愛液・精液などを口に含む、飲み込むなどを行っても良い。

ただしこれらは、服従心をお示しした上で健児・マリコご夫妻が許しを与えた場合に限り。また、奴隷はタンパク質を、健児・マリコご夫妻の精液・愛液以外から摂取してはならない。また半年後には肉体のすべてのタンパク質が健児・マリコご夫妻から与えられた精液・愛液のみで構成されていなければならない。

※※※試験その5 衣服に関する試験※※※

健児・マリコご夫妻にご迷惑がかからない範囲で、奴隷は裸を基本とする。

試験開始時に一切の衣服を処分し、衣服を着る場合は健児・マリコご夫妻の許可が有る場合に限り、指定された衣服のみを購入、着用すること。

※※※試験その6 歩き方※※※

外を歩く際は四つん這い、あるいは頭を低くした状態で歩くこと。

これは健児・マリコご夫妻がその場にいたいといまいと確実に行わなければならない。

四つん這いの際は、頭を健児・マリコご夫妻の膝の高さよりも上にあげてはならない。

頭を低くして歩く際は、頭を健児・マリコご夫妻の胸の高さよりも上にあげてはならない。

ただし健児・マリコご夫妻両名の許可がある場合に限り、『普通の人』と同じように前を向いて歩くことが許される。この場合、奴隷は必ず自らの表情が万人によく見えるようにしておかねばならない。顔を隠すなどの反抗的行為があった場合、奴隷は健児・マリコご夫妻から懲罰として、チ●ポに焼き印を入れてもらうものとする。

※※※免除項目※※※

これらの試験には特別に救済措置を用意する。

健児・マリコご夫妻お二人から懲罰を受け、奴隷が明らかに肉体的かつ、社会的制裁を受けた場合に限り、追試験を行う。

懲罰・追試験を受けることは奴隷の義務であり、辞退することは出来ない。

よって奴隷が辞退できるのは本試験を受ける前の段階のみである。

また試験の可否に関わらず、健児・マリコご夫妻は奴隷を自由に廃棄・譲渡することが出来る。

※※※試験期間に関して※※※

奴隷として正式に採用するのは健児・マリコご夫妻が婚姻届を役所に申請し、受理されるまでとする。

健児・マリコご夫妻の婚姻届が受理されるまでは試験期間であり、正式な奴隷ではない。

よって、健児・マリコご夫妻のご自宅に上がることは許されない。

また合格した場合は、本試験を奴隷が逝去するまで続けるものとする。

最後に、本試験は奴隷の意思によって行われることの証明として、奴隷は全財産を金銭に換え、その金銭でマリコ婦人の婚姻届に押印する実印を自ら購入するものとする。

購入に際し、マリコ婦人に見合う最高級品を用意すること。

以上。

1. 射精できない勃起。

私と健二は、さんざん二人で愛し合った後のラブホに耕平を呼び出した。

耕平は初めてこういうところに来たみたいで、きよろきよろと周囲を見回すかと思っただけ、私達の愛の残り香を嗅いだせいか、急にキョドったりしていた。

でも私達二人の、左手の薬指に輝くダイヤとプラチナの指輪を見て自分の立場を思い出したみたい。

私は裸のまま、健二が作ったこの2枚の紙きれを持って、健二とともに耕平の前に立つ。

そして貞操帯さえ外して全裸にした耕平に、試験項目を音読させた。

私は一度目のそれを少し緊張しながら聞いていたけど、二度目、三度目と何度も音読させるうちに慣れてきたのか、肩の力も抜けて『自然と耕平を見下ろしていた』。

健二は最初から緊張なんかしていなかったけど、耕平はガツガチガチ。

寝取られるだけで悔しくて、オナニーさえさせてもらえない……。それだけで十分だと思っていたのだろう。

まさかその先があると思っていなかったのだろう。

『夫婦共有奴隷』

言葉にすればなんて簡単な言葉なんだろう。

私が耕平の立場なら絶対にお断り。

だって、同性に服従させられるなんて耐えられない。

普通そうさ。

誰だってそうさ。

でも耕平だけはそんなわがまま、許されない。

絶対だ。

だから義務がある。

夫婦共有の奴隷として生きる義務が…。

耕平は試験項目を読み上げる三回目には、チ●ポを勃起させて、その膨れ上がった先っちょから涙を流した。

多分頭でなく体が理解したのだろう。

だからチ●ポが歓喜の涙を流した。

生涯マゾ奴隷として生きることができるとのこと…。

この試験を受ける義務があり、合格する義務があり、私達に尽くす義務があると。

「氷水をたらいに張りなさい。

早速だけど、私達二人にそのまま土下座でおねだりしてもらおうわよ。

『僕、この試験受けたいでチュ。』

どうかお二人の奴隷として一生ご奉仕しますので、共有奴隷にさせてくださいませ〜』
ってね。

ちゃんとおねだりできたら、そのままオナニーさせてあげるわよ。

土下座したまま、オナニーしなさい。
最後まで見てあげる。

でもちゃんとおねだりできなかったら、そのまま卑小なチ●ポを氷水に浸けて、もとの
サイズに戻しなさい。

そのまま貞操帯を嵌めるから」

「く…っ！ぼ…僕は…」

「たらいが先でしょ？」

ほら、早くしなさい」

私にそう急かされて耕平は、まるで引き回される罪人のように腰を曲げて俯いたままお
風呂のたらいに氷を目一杯入れ、水を零れぬ高さまで張った。

そして腕組みして見下す私達の足元にたらいを置いて、土下座。

「ぼ、僕…、この試験受けたいでチュっ…、チュっ。

どうかお二人の奴隷として一生ご奉仕しますので、共有奴隷にさせてくださいま…
…ませ」

「ずいぶん簡単に言っちゃうんだね♪」

健二の指摘に耕平が震える。

私はそれがなんでなのか、すぐに分かった。

否。

多分この場にいる全員が最初から分かっていたのだろう。

耕平はオナニーしたいのだ。

今！ここでっ！私達に見られながらっ！！盛大に射精っ！！！！

そう言われてみれば、大学に入って3年と半年。

私は一度も耕平の貞操帯を外さなかった。

夢精さえも許さなかった。

最初から『貞操帯を着けたままで中を洗える構造、中の状態を確認できる透明な材質』
のものを選んで着けさせておいたからだ。

だから一日千秋を千日以上、待ち続けたこのチャンス。

彼にしてみれば逃すわけに行かないのだ。

それがどんなに屈辱的で、どんなに情けなく、どんなに強大な見返りを支払ったとして
も。

そしてオナニーの代償が、自分が踏み込むことのできない領域で、二度と引き返せない
奴隷の生活だったとしても…。

「すみません…：…したい…：…です。オナニー…：…したいんです…：…」

「呆れた。」

あなたがオナニーを夢見てる間、健二は私を抱いて、起業まで成功させていたのよ？

耕平はその間、オナニーを夢見ただけ？

なっつっさけないわね！」

「ぐっ…ふぐっ…」

床に三指を突いて、おでこを床に擦り付け土下座する目の前のマゾが、男泣きする。私はそれがなんとも気持ち良かった。嬉しくてたまらない。

耕平の心のあるべき正しい場所に戻した…そんな達成感にも似た感覚。

「いいわよ。しなさい」

耕平は私の許可を受けるや否や、感謝の言葉もそこに土下座のまま股を少し開いて、右手でしごき始めた。

かなり右手は早く動く。

「何秒で逝くかしら」

「10秒はかからないさ」

「…そんなんじや女の子は喜ばせられないわね」

私がそう言った時だった。

耕平は射精したようで「ぐっ」と低い声を上げて、そのまま動かなくなってしまった。

耕平の激しい呼吸音だけが2〜3秒部屋に響いた後、私と健二の笑い声が空間を支配する。

健二は嫌がる耕平を立たせて、羽交い締めにし強い口調で耕平に怒鳴る。

「試験項目、もう忘れちゃったか？」

射精禁止。

万が一これを破った場合、一生射精できない施術を奴隷に施す。

例外は一切認めない。

そう書いてあったはずだぜ？

お前、3回も音読したのに、もう忘れたのか？」

「で…でもっ！…オナニーの許可を…」

「ええ、そうね。

確かにその通りよ。

でも、射精の許可まで与えてはいないわ。

あの試験項目を見る限り、射精無しでオナニーしなさいって意味でしょ？

「…そんなことも分からないの？」

「そ…そんな…」

「っつーわけで罰な。

知ってるか？

勃起したままのチ●ポの中に瞬間接着剤を流し込むとな。

尿道が勃起したまま固まるから、勃起が収まらないんだ。

正確には、『勃起が収まりそうになると、チ●ポの中が固まっているから死ぬほど痛い』。

